

「八戸湊」(鮫・湊、白金の総称)は江戸時代、全国から海運によって人や物資がさかんに出入りする八戸藩の海の玄関口であった。



鮫の遊郭と芸妓たち
(明治末期・県史編さんグループ所蔵)

八戸湊と遊女

相馬 英生

(県史編さん調査研究員・三戸町立図書館)

指すと考えられ、彼女たちを抱えた宿は「船小宿」といった。同年7月の書き上げによると、湊に42名、鮫に31名の飯盛女がいたことがわかる。

八戸城下の商人、大岡長兵衛が記した「多志南美草」によると、ある商人は1年の大半を鮫や湊で過ごしているという。また、安政7年(1860)9月には藩から次のような言い渡しが行われた。

「近ごろ在町のものが家業を投げ打って鮫や湊の船小宿へやって来て、さらには別荘等を構え、我が家同然の者もいる。他領の商人との付き合いならばかまわないが、自分の遊興のために、鮫や湊の船小宿へ出入りすることは遠慮するように。」

八戸湊はいわば江戸吉原のような遊郭としての性格もあわせ持ち、八戸藩領内各地から大勢の人々が入り浸っている様子が窺える。藩の出入り禁止令も効果のほどは疑わしい。

八戸湊の船小宿の経営者は、天保期(1830)1843)に飯盛女を盛岡城下以北の地域、すなわち三戸、五戸、野辺地、さらには下北まで派遣するという積極的な営業活動もしていた。

さらに彼女たちが八戸藩と接する盛岡藩領、特に「浜街道」といわれる三陸

海岸に沿った地域から八戸湊の船小宿へ奉公に出されていたこと、船小宿へ女性を斡旋する遊女ブローカーが存在したことが史料から垣間見える。

また、飯盛女を相手にした職業と思われる人々も全国から八戸湊へ集まっている。

嘉永4年(1851)9月、「武州足上郡千住三丁目」(現東京都足立区)の中田屋清兵衛の息子が踊師匠として鮫村住居願を、嘉永5年2月には、盛岡領遠野の髪結が一家で湊への住居願を藩へ願い出ている。彼らは主に飯盛女への芸事を指導したり、彼女たちを相手にする髪結いではなかったかと考えられる。

江戸時代の八戸湊を飯盛女という視点から見ると、八戸藩領内はもとより全国各地から集まる多くの人々で賑わう様相が浮かび上がってくるのである。